

夏の草地管理

—かんがい、庇陰、追肥が大切—

草地の造成は、造ることそのものより改良後の維持管理が大切で、僅かな気の緩みから或は無計画な利用から、再び荒廃させて仕舞ったり草生を著しく減退させて生産量を半減し、また一部の草種のみが繁茂し、他の草種がなくなってしまうような現象が起ります。

真庭郡のある町では、町を挙げて急傾斜地の牧野造成に懸命の努力を続けていますが、此処に昭和30年の春、播種した1haの牧野があります。この牧野は改良後すでに5年に成りますが、10アール当りの生産量が今なお7,500kgで、まだ当分減収の徴候は見られません。そうかと思うと、草地造成後1~2年で相当に雑草の繁茂した牧野を見ることがあります。このように草地は造成後の管理により著しく寿命を延したり短くしたりしますので、日常の管理について十分に気をつけなければなりません。つぎにこれからの暑い時期の草地管理についての要点を述べることにいたします。

夏枯れ対策

まず第一に『草地を夏枯れから護ること』です。

牧草地のかんがいは外国では広く一般に普及していますが、日本では長野、山梨、岩手の一部で行われているに過ぎず、一般にまだ普及していません。

元来牧草は冷涼な気候を好み水分も可成りの量を必要としますので、夏季のかんがいは非常に収穫を増加させます。

千葉県では夏に灌がいを行って、10アール当り12,000kgの収量を挙げた例もあり、また夏のさかりにも休ませずに刈取りを行なった例などいろいろあります。かんがいのやり方は、畑では、うね間かんがい、平坦地では撒水かんがいが行われます。

外国ではスプリンクラーによって撒水を行なって、無かんがい草地に比較して、2倍~4倍の収かくを挙げています。暑い夏の間10日~20日に1回位の割でかんがいを行ってやれば効果をあげることが出来ます。

この様にかんがいのほか、日光の直射から譲って

やることも有効です。

庇陰

この方法には庇陰樹の植栽があります。これは補助事業で行った集約牧野等の場合はいろいろと制約を受けますが、一般には開墾の場合立木を残すか、或は後から木を植えて日陰を作ってやる方法です。植樹する場合、大体10アール当り30本位、その種類は山はん、ねむの木等で、最近では庇陰と実取りの一石二鳥をねらって栗の木が使われる事もあります。密度は地形や場所により幾分の相違はありますが、一庇陰樹の真下にできる日陰が総面積の30%位の場合が一番よいと言われていています。然しこの庇陰樹は草地の利用形態により一概にいえないことは申すまでもありません。

追肥

次に考えなければならぬ事は追肥です。

英語で『ギブ・アンド・テイク』と云う言葉があります。と云う言葉があります。これは草地管理の根本であると思います。特に牧草は米、麦と違って茎葉をしっかり伸ばせばよいのですから、施肥量の多少によって収量が著しく増減されます。また施肥量の多少は牧草の中に含まれる蛋白質や他の養分量にも影響します。

普通施肥は春芽の出かけと夏秋の3回位に、10アール当り40~80kgを与えるとその効果を挙げる事が出来ます。クロバーの様な荳科牧草が主体の場合は燐酸カリ分を多目に、また禾本科の牧草が主体の場合は窒素分を多目に考えてやる事が大切です。

三番目過放牧にならぬ様にすることです。

放牧について

今までの草地は殆んどが刈取りでしたが、最近では経営の合理化のため次第に放牧が行われるようになりました。放牧はそれ自体が牧草の刈取りであり、糞や尿はそのまま追肥になるわけです。しかし余程気をつけないとかえって草地荒らしてしまいます。即ち播種後最初の放牧の場合は、まだ牧草の根が十分張っていないので、放牧は軽くするか、でき得れ

岡山畜産便り 1962.06

ば播種の翌年は刈り取りだけにして、次の年から放牧する方が後の成績が良い様です。又小面積に多数の家畜を放牧したり、同一箇所長く放牧すると、草の力を著しく弱めます。また逆に面積に比較して頭数が少ないと、牧草が伸び過ぎて草質を落とし又生産量も落ちます。このような場合は余程気を付けて掃除刈りをしたり、また排糞したものの処理をしてやらないと、折角の牧野を荒らしてしまうことになります。

元来牧草は20日から35日位で元の姿に帰るのが普通です。又夏7月中旬から8月一杯は暑さのため牧草が、大変弱っていますから、草地を休ませて青刈トウモロコシとか青刈大豆等の飼料作物に依存した方が賢明です。(県畜産課草地係)